https://rodosoken.com/

高齢者の住宅保障問題

小泉　英雄

はじめに

高齢者の住宅問題を考えるとき、単に住宅の大きさや構造だけで論ずることはできない。余程の豪邸でない限り、毎日家の中で生活していて、肉体にも精神にも良い筈がない。しかし、現在の車に満ち緑の乏しい町で、老人が安心して戸外の生活を楽しめるだろうか。

環境問題だけではない。家庭を含めて社会が、今、高齢者に生きがいを感じさせられるように機能しているだろうか。高齢者がふえると、当然、体の不自由な人、日常生活に介護を要する人もふえる。今の家庭にこれらの老人を介護する能力が十分あるだろうか。また、独居老人は誰が世話すればよいか。

高齢者の体の様子や家庭の状態などの関係で、どうしても老人ホームや老人病院などに入らねばならない人もでてくる。今、これらの施設は十分に老後の幸せを保証するものになっているだろうか。

これらのことを十分考え、今から対策を講じておく必要がある。その一つとして住宅問題がある。

住宅の狭小さと構造の不備

去る10月19日、自民党総裁選挙に関するNHKの番組で放映された、ドイツのシュミット前首相の言葉が印象に残った。即ち「1人当りGNPの高い日本の市民が、先進国中で最も小さい家に貧しく住んでいる。新首相は、先づ国民の基本的な生活を向上させることに務めるべきだ。そうすれば貿易摩擦等も自ら軽減される」というのである。

まことに、70年頃のフランス人による〝ウサギ小屋〟発言以来、日本の貧しい住宅事情は世界の注目するところとなっている。しかし、政府にこの問題を解決する意欲は見られないし、国民の間の意識も十分とは言えない。

このことは後で論ずるとして、貧しい住宅の最大の被害者は高齢者である。以下、簡単にいくつかの例をあげる。

寝たきり老人と痴呆老人は、最も不幸な〝人生の最後〟であろうが、この2つの発生に住宅の狭さが大いに関係している。

住宅が狭いと、どうしても小さな部屋にこもりきりになる。それだけでも体や心によい筈はないが、そこにちょっとした腰痛や、長いカゼなどで寝込んだのが動機で、横になっている時間が長くなり、遂には寝たきりになった例が非常に多い。

この場合、孤独な老夫婦や独居老人でなくても、大家族でも子や孫に対する遠慮や煩雑感から老人は自ら閉じこもりがちである。また、老人の気力や生きがい感も大いに関係し、今まで何とか自立していても、配偶者を失った途端に寝たきりに進むような場合も多い。

https://rodosoken.com/

小さな部屋に閉じこもっていると会話が少なくなる。老人性痴呆の中には、アルツハイマー病など、今のところ予防できないものもあるが、多くは、誰にでも何時かはくる記憶力や判断力の低下が、より早く、より激しく来るものであって、かなりの程度、防げるものであり、その防止に最も良いのが会話である。週に1万語しゃべらなければ呆けるという研究もある。

読書が会話の代用になることもあろう。しかし、高級な本を1日中読んでいられるのは特殊な人に限り、一般の老人に適するものではない。テレビもないよりはマシであろう。しかし、現在の番組は主にヤングから中年向けに作られており、老人の孤独をなぐさめ、活力をつける番組は少ない。

家の狭さと同等に、あるいはそれ以上に高齢者を苦しめているのは、日本の家やマンション、アパートの構造上の問題である。

案外知られていないが、我が国では家庭内事故が甚だ多く、年間1万人の死亡者がでており、交通事故によるそれに匹敵する。けが人は年間100万人を超えると推定されている。

その家庭内事故は高齢者に圧倒的に多いが、その半数を階段での事故が占めている。狭いわりに2階建ての多い日本の家の階段には、3つの悪しき特徴がある。急なこと、踏みしろの小さいこと、手すりのないことであり、この特質は、かなり高価なマンションや分譲住宅にもみられる。

尚、階段の昇り降りだが、元来心臓の病気の人や、少し弱った老人では、上るより降りる方が苦しいと訴える人が多い。最近の高層住宅で、2階毎、あるいはそれ以上の階毎に出入口があるエレベーターの設置されているものを見受ける。上るときにも下るときにも階段を上らずにすむ、という発想からであろうが、これは若い健康な人の発想である。

階段と共に、高齢者のケガのもとになっているのは家屋内の段差である。段差は家を豪華に見せる効果があるからか、新しい家にも意識的に作られている場合があるが、これがケガのもとになり、また、老人に家の中の移動を億劫がらせ怖がらせて、閉じこもらせる原因になっている。

高齢者の増加につれて、車椅子で生活せざるを得ない人も当然ふえる。しかし、今直ちに車椅子生活が可能な住宅は、日本には殆んどないと云ってよく、改造も難しいのが多い。今まづ、改造可能な建て方を普及し、また必要となれば、無理をしても改造しなければならない。しかし、これらは個人の力では不可能で、国や自治体の責任に属する。(1)

粗末な住環境

古くからある狭い道路にも、1960年代から急速に自動車がふえ、今や都市も田舎も自動車で満ちている。最近にできた道にはかなり広い道路も多いが、それだけに交通量も多く、高速で走っている。歩道が完備されている道は少なく、近くにあっても家からそこに出るまでに、必ず狭い道を通らねばならない。

この道路状況が高齢者の外出や運動を妨げ、その健康や幸せに及ぼしている悪影響は計り知れない。今後、道路の整備、歩行者道路や散策コースの設定も大切であるが、根本的には、今の経済成長一点張りのあり方を転換して車を減らすことが必要であろう。

また、たとえ外出が可能でも、今では憩う場所が全く少ない。ドイツでは、どの住宅地からも歩いて10分以内に森や公園があるのが当然のこととして都市が作られている。しかし日本では、これは政策のラチ外にあった。(2)

https://rodosoken.com/

ただ昔は、車が少なくて狭い道も歩くには広かった上に、到る所に田畑や雑草の生えている空地があり、木の茂るお宮やお寺があった。空地や田畑が減ったのは、現在の政策の帰結としても、寺社の杜が駐車場に変わっているのは奇異な現象と云えよう。

一方、公害地区や幹線道路の近くに住む人に、喘息や慢性気管支炎を患う人が明らかに多く、それも高齢の人ほど多い。(3)

高齢者の家庭問題と家庭の看護能力

6畳2間の家に共働きの息子夫婦、2人の孫と住んでいた老女が、孫に「おばあちゃんが死んだら僕の勉強部屋になるのに」と云われたのがきっかけで、自殺を企図した例がある。

このように、住居が狭過ぎるとどうしても家庭内にあつれきが起こり、老人が犠牲になる。戦前には、このような問題は比較的少なかった。それは、その頃は子どもの戸外で遊ぶ空間が多く、また老人が外出しても、そこには貧しくとも暖い地域社会が存在した。

都市化の進んだ現在、周辺地域のコミュニケーションは縮小し、行動範囲の狭い老人は、どうしても小さな部屋に孤立しがちになる。

一方、現在の日本の労働時間と通勤時間の異常な長さが家庭内のコミュニケーションを壊し、家庭の機能さえ危機に瀕している。この状態で、どうして健やかな老後が望めよう。

特に、日常生活を犠牲にして働くのが当然のようになっている現在の男性達が高齢化したとき、彼らは深刻な〝生き方にとまどう〟生活を余儀なくされる可能性がある。それを避ける意味でも、労働条件を直ちに変える運動に着手し、自らの生活を今からでも180度転換することが急務である。(4)

次に、高齢者が高齢や病気で、日常生活に介護を要するようになった場合はどうか。

戦前の農村型大家族から、戦後の都市型家族に核家族化が進むにつれ、家族の介護能力の衰退は不可否的である。また、女性の社会進出という好ましい現象が、一方で家庭の介護能力を低下させるのも当然である。ヨーロッパの国々でも、数十年前までは老人の面倒は家庭でみるのが普通であり、福祉制度が進んだのはここ2～30年のことである。北欧で特に発達したのは、北欧で女性の社会進出が特に進んでいたのも一因と云われる。(5)

日本では、今のところ福祉は無いに等しいので、低い能力の家族が能力を超える仕事を強いられ、そこに生じた無理が様々な老人や家庭の悲劇を招いている。例えば、日本独特の〝寝たきり老人〟の存在である。

もともと、住みなれた環境を変えることに抵抗の強い老人を、家庭で介護できれば、それに越したことはない。しかし、それには十分な数のホームヘルパーと余裕のあるデーイステイ施設が、どうしても必要である。

そして、特に重要なことは、それらの福祉制度が国や自治体、特に国の責任において運用されなければならないことである。

旅行や会合など老人の非日常的な楽しみに果すボランティア活動の意義は大きい。しかし、日常生活の基本的な人権にかかわる部分は、国の責任において行政がやらねばならぬ。因みにスウェーデンでは、主婦が自分や夫の親を介護する場合、国は彼女が老人ホームで働いたのと同じ給料を支給している。(6)

独居老人の悲劇はしばしば新聞をにぎわす。だが、あれは氷山の一角である。先日もある警察の嘱託医が、3日毎に3回、検屍に呼ばれたが、対象はみな独居老人で、どの屍体にもウジがわいていたという。

https://rodosoken.com/

ところで、独居老人は日本だけのものではない。先進国なら、どこでも同じ位の数の独居者が居る筈である。それなのに、社会福祉の発達した国々では、何故こんな悲劇が起こっていないのか。

それは、これらの国々では、ホームヘルパー等による日常の世話が行き届いている上に、危急の場合にはボタン１つで通報できるシステムが完備し、その連絡に対応できる人材が四六時中待機しているからである。(7)

言うまでもなく、これらの情報技術は日本の方が発達していて、車内で携帯電話を使っている人を普通に見かける。だから、やる気があれば日本でも直ちに可能である。要は、優れた技術を、より金を貯めるために使うか、老人や障害者の福祉のために使うかの違いである。

老人ホームと老人病院

家庭の介護能力を超える状態にある高齢者が施設に収容されるのは止むを得ないが、それは、あくまで老人ホームか特別養護老人ホームであって、高齢による機能障害で年余にわたって病院に入院している日本の現状は、極めて異常である。

ところで、この老人ホームも日本のそれは殆んど体をなしていないと云ってよい。何故なら、公営のものには個室は殆んどなく、１室４人が普通である。これは老人ホームの老人達は入所した途端に基本的人権を奪われるということであり、近代国家では見られない筈のものである。それどころか、北欧の国々では、調度品やカーテン等も家庭で使っていた物を持ち込ませる。できるだけお年寄りに、今までと変らない生活を楽しんでほしいからだ。

一般に、西・北欧の老人ホームは、老人の残存能力を引き出し保存するよう、つまり、できることは自分でさせるよう介護するのに対し、日本では、何でもしてあげる、介護者が手を出し過ぎると云われている。これは、後者の方が人手が少なくてすむからである。

一見、西・北欧の方が酷のように見える。しかし、昼は起きて生活し、用便も出来る限り自分でたすのが人の最低の望みであり、権利でもある。しかし、それをかなえるには介助が要る。真の福祉国家では、このための介護の人手と、高価な補助器具に費用を惜しまない。それで、これらの国々には寝たきり老人は殆んどなく、それを老人達のノーマリゼーションと言っている。(8)

高齢化社会へ向けての住問題

明治維新以来、政府は富国強兵の政策をとり、国民の生活を全く顧みずに、一貫して経済成長を求めてきた。この間、国民もこの考え方に慣れ、特に住問題では、住宅の大小は個人の甲斐性、つまり経済成長への貢献度によるという感情が定着し、住問題を人権問題としてとらえる気運は育たなかった。

1945年の敗戦によって富国強兵政策は破綻したものの、経済成長一本槍の政策はむしろ増大した。国民も、戦前に培われた企業に対する忠誠心のせいもあり、ウサギ小屋に住む働き蜂と云われるほど生産に懸命で自らの生活を省みなかった。賃上げには成果を挙げてきた労働組合も、住問題を労働者の人権問題ととらえる感覚に欠けていた。

金のみが絶対的な価値を持ったこの時代に、もともと投機の対象であった地価が暴騰するのは、むしろ当然の帰結であった。そして今や〝豊かな住生活〟は多数市民の夢物語になった感があるが、市民は今なお、これを直視することを避け、ゴルフ、トラベル、グルメに逃げている

https://rodosoken.com/

傾きがある。

この風潮の最大の犠牲者は子どもで、次が老人である。子どもの問題は今は暫く措くとしても、高齢化社会を迎えつつある今こそ、私達が根本的に考え方を変え、日常生活を基本に据えて、万人が生きる幸せを感じる社会をつくる好機である。

また、福祉において人権にかかわる部分は、国の責任においてなされねばならないことは度々述べたが、それには相当の財政負担がいる。その税負担は消費税のような大衆課税ではなく、所得による累進課税でなければ意味をなさず、現に北欧諸国では70～80%に及ぶ所得税を国民は喜んで払っている。課税の公平さや使途の不明朗さが改革さるべきも当然である。

最後に、住宅問題に関する限り、欧米諸国は我が国と比較してかなり成功している。しかし、これは決して傑出した為政者の力によるものではない。それは、住民の、住民による、住民のための長くて苦しい闘いの結果である。そして、今なお、各国の多くの市や町で、よりよくしようとするラジカルな住民運動が行われていると云う。(9)

〈注〉

(1)、(3)小泉英雄：健康のための住宅読本
岩波ブックレット '90

(2)、(4)暉峻淑子：豊かさとは何か
岩波新書 '89

(5)、(6)、(7)、(8)山井和則：世界の高齢者福祉
岩波新書 '91

(9)早川和男：欧米住宅物語　新潮選書 '90

(小児科医師、兵庫県保険医協会副理事長)

読者の広場

去る2月、新しい労働組合を結成しました。今回専門部を作って、本格的な労働運動を取り組もうと思っています。それにはまず勉強です。経営者を説得していくにも、理論が必要です。労働総研に期待しています。

(K・Y／福岡)

本誌のとじ込みハガキにて、あなたもご感想・ご意見をお寄せ下さい。